東方新米巫女奮闘記？

ドライアイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方新米巫女奮闘記？

【Ｎコード】

Ｎ１８８１Ｙ

【作者名】

ドライアイ

【あらすじ】

この物語は守矢神社移転に誤ってくっついてきた一般人？が巫女として幻想郷での日々をほのぼの・のんびり過ごす物語です。作者はへたれ、文才なし、不定期投稿の三拍子ですので注意してください。

雨、参拝ところにより反転（前書き）

改定は題名のみです、本文は変わっておりません。

雨、参拝ところにより反転

〜？？？〜

トン、トン、トン、

この階段を昇るのも久しぶりだなぁ。

父と母が亡くなってからばたばたしてたからきてなかったけど早苗ちゃん元気にしてるかなぁ…。そんなことを思いながら私は守矢神社の階段を登りきり境内へでる。

「ふぅ…やっと着いた。相変わらず閑散としてるなぁ、まあこんな山奥にあるから仕方ないんだろうけど。」

きょろきょろと早苗ちゃんを探してみるがどこにもいない。母屋の方にいるのかな？いつもならすぐに気づいてでてきてくれるんだけど…。少し残念だけど参拝してから顔を出せばいいかな、そう思いながら礼をし鳥居から入り手を清め参道の中央を通らないように拝殿へを近づく。

パンッ、パンッ

二礼二拍手一礼

「父さん、母さんが無事天国へとつけます様に。」

今日の目的を果たし、さて早苗ちゃんに顔を出しに行こうかな…そう思ったところで世界が反転し私の意識は途絶えた…

～神奈子～

「早苗、本当にいいんだね。今なら引き返せるんだよ。」

「はい。もう両親や友人にも挨拶は済ませました。…ただアヤメさんに挨拶できなかったのは少し残念ですが、もう迷いはありません。」

そう言い良い顔で見つめてくる早苗。本当に覚悟を決めた様子にうれしく思いながらも早苗の両親に申し訳なさがわいてくる。

「ふぅ。そうか…幻想郷へ行ってからも迷惑をかけるがよろしく頼むぞ早苗。」

「そうだよー、頼りにしてるかなね早苗。」

うれしそうに頷く早苗を見て私達の覚悟も決まる。前々から諏訪子と早苗を連れて行ってもいいか話し合っていたが、無駄だったようだな。

「しかし結局アヤメに挨拶できなかったのか。あいつには私達も挨拶したかったんだがな。」

「そうだねぇ。これまでこの世界にいられたのもあの子が時々参拝にきてくれてたからだしねぇ～。」

「え？どういうことですか？」

「いやぁ私達も良くわからないんだけどね。あの子が参拝してくれると一度で信仰力がかなり回復するんだよ。正直早苗がみんなに挨拶する余裕が出来たのも子のこのおかげかな…だから挨拶しておきたかったんだけどねぇ。」

「まぁあの子も両親がなくなって慌しかったようだし…もう私達の時間もあまり無いようだしな。…はじめるよ諏訪子。」

「はいよ。」

術を発動し諏訪子と同時に神力をこめ始める…

「なっ！」

「えぇ！」

まずい！神力が足りないこのままでは術が不発に終わってしまう。しかし私も諏訪子もこれが限界…くっ！何とかしなくては…。

「むっ？」

「え？…よしっ！ラスト気張るよ神奈子！」

流れ込んできた力を振り絞り術を発動させる。

…瞬間世界は反転し。私達は新天地へとたどり着いた。

「はぁ～。何とかなったねぇ～、途中で神力足りなくなったときはどうなることかと思ったけど…。」

「ふぅ、そうだな。だがなぜ途中で信仰力が回復したの……早苗！境内に誰かいる！もしかしたら連れてきてしまったのかもしれない！」

「な！見てきます！」

まずいことになった。パタパタと駆けていく早苗を見ながらそんなことを思う…。とりあえず早苗が戻ってくるまでこれからのことを諏訪子と相談するか…。

～？？？～

あれ？ここは…どこ？でもなんだか見たことあるような…。
きょろきょろ見回しているとふすまが開き入ってきた、奇妙な目の着いた帽子を被った少女と目が合った。

「あの、ここ「早苗ー、アヤメが起きたよー」えと…あれ？」

ここどこか聞きたかったんだけど走って行っちゃった…。というか早苗ちゃんの知り合い？守矢神社の境内で何度かみたことあっるけど・・・。

ダダダッ！スパン！

「あやめさん！大丈夫ですか！どこか怪我とかしてないですか！？」

「あの、早苗ちゃん落ち着いて、大丈夫だから。ね？」

早苗ちゃんが物凄い勢いで迫ってきて正直怖い！本当に怖い！

「あ…ごめんなさい。それで体は大丈夫ですか？境内に倒れてて本当に驚いたんですから…。」

「大丈夫だよ、心配してくれてありがとう。」

「ほっ。そうですか安心しました。」

「…ここは母屋だよね？あとどれくらい気を失ってたの？」

「えぇここは守矢神社の母屋です、神奈子様に運んでもらいました。気を失ってたのは３０分くらいです。」

神奈子様？いやそれより３０分も気を失ってたんだ。本当になんだったんだろあの感じ？

「…あの、アヤメさんさん。実はお話したいことがありまして…。座敷の方まできて貰えませんか？」

「話したいこと？うん、わかったよ。」

私がうなづくと早苗ちゃんは神妙な面持ちのまま座敷の方へ歩いていく、私もそれに習い早苗ちゃんの後ろをついていく。

むぅ、話したいことって何だろ？あんな真剣な顔で…私何か起こられるような事したかなぁ…前来た時に持ってきたロシアンルーレットのお菓子に当たった事？…違う気がする。

座敷に着き早苗ちゃんが止まる。

「では少し準備があるので声をかけたら入ってきてください。」

「うん。」

スッ、パタン。

準備？ということはお誕生日会とか…でも私誕生日３月だしなぁ今は９月、違うかぁじゃあ「どうぞ。」まあ入ってみればわかるかな

あ。

スッ、「「「申し訳ございませんでした。」」」

そこにあったのは土下座だった。…背をピンと張り美しい正座の体勢から三つ指をつき頭を地面につかんばかりに下げる。とてもきれいな【ＤＯ★ＧＥ★ＺＡ】だった。

え？なにこの状況？なんで私三人に土下座されてるの？早苗ちゃんはいいとして（よくないけど）さっき会った帽子を被った子と注連縄？と柱？を背負った女性は初対面のはずだよね。なんで初対面の人に土下座されてるの？

「え？え？なにこの状況？とりあえず頭を上げてください。私にもわかるように状況説明を求めます！本当にお願いだからやめてー。」

――神々説明中――

「なるほどなるほど、あなた方はこの守矢神社の祭神であらせられる、建御名方神様と洩矢神様で、現代では信仰心が集められないから新天地である幻想郷？に神社ごと引っ越してきたと。でその引越

しに私が巻き込まれて一緒に来てしまった。幻想郷へは一方通行なので私は帰れない。という訳ですね。なるほどなるほど。」

「うんうんそうそう、さっすがアヤメ理解が早い。」

こくこく頷く諏訪子様。うん可愛い、でも…

「納得できるかー！！」

目の前にあるちゃぶ台をひっくり返す…フリをする。あ、三人がビクッてした。

「神社ごと引っ越すてどういうこと！？巻き込むってなに！？なんで神奈子様と諏訪子様が私に見えてるの！？というか現代にもいらっしゃたじゃないですか！ときどき社のほうから私達のほうを見ているの見えてましたよ！姿が見えるなら神様パワー発揮して現代で信仰集めればいいじゃないですか！なんで早苗ちゃんとご家族を引き離すようなことしたんですか！」

「あう～、アヤメがキレちゃった。」

「あはははぁ、というかまず出てくる文句が私のことなんですね…」

「むぅ。」

ぜは、ぜはいいながらまくし立てて急速に頭が冷えてくる。早苗ちゃん賢い子だからきっとよく考えて覚悟した上での結論なんだろうなぁ。うぅ悪い事言っちゃった…よし謝っちゃえ。

「ふぅ〜。ごめんなさい。」

「「「え！謝っちゃった！？。」」」

「うぅ…パニックになってごめんなさい。いろいろひどいことといっちゃいましたよねぇ。あと早苗ちゃん「へ〜アヤメさんでもパニックになるんだ〜」みたいな目線はや〜め〜て〜。本気で凹んじゃうからぁ。」

「えっ、あっ、ごめんなさい！でもパニックになるのも仕方ないですよ。」

「そーだよね。誰だってこんなことになったらパニックになるって。気にしない気にしない。」

「こら諏訪子！あんたはもうちょっと気にしなさい！…すまないアヤメ巻き込んでしまったのは私達のミスだ。どれだけ怒ってくれてもかまわない、すまなかった。」

「あっ！いいんですよぉ、神奈子様も気にしないでください。」

「だがな、「私がいいといったらいいんです。気にしないでく・だ・さ・い。」あっ、あぁ。」

「うふふっ。アヤメさんほんとかわってませんね。…でもほんとにいいんですか、もう友達にも会えないんですよ？」

「あぁもお！そんな泣きそうな顔しないの！くよくよしたってしかたないじゃない。そんなことよりこれからのことを考えましょ。いいわね？」

「はい。アヤメさんほんとにありがとうございます。」

「…あははっ。アヤメにかかれば神奈子も早苗も形無しだねぇ。」

「あれ？私諏訪子様を許すって言いましたっけぇ？諏訪子様には罰を与えます！」

「え！なんで私だけ！許してよ～アヤメ～。」

「な！諏訪子だけなんて駄目だ！罰するなら私も！」

「いいえ！神奈子様と諏訪子様にそんなことさせません！やるなら私を！」

「だ～め。さぁ諏訪子様罰です！」

ニヤニヤしながら私は膝をぽんぽん叩く。…あれ？みんなキョトンとしてる。

「あれ？諏訪子様～？罰ですよ～？早く帽子抜いてここに座ってください。」

「え？」

「え？じゃないです。」

まだ呆けている諏訪子様をひょっと膝の上の乗せて帽子を横に置く。ギュ…うん満足！

「え～と、アヤメ？それが罰か？」

「えぇ、神様ともあろうお方が人の膝の上に座るなんて屈辱以外の何者でもないはず！どうです？見事な罰でしょう？」

ふふんと胸を張ってみせる。あっ、諏訪子様あったかくて落ち着くぅ～。

「そんなこと言ってもそんな蕩けた顔では説得力ありませんよ？…まぁそんな事？ならいいんですかね？」

「まぁ諏訪子がよければいいんじゃないか？」

「あ～う～、まぁこんなことで許してくれるならいいけどさ～。」

「じゃあ諏訪子様の了承を得られたところで、本題に入りましょう。…えと本題ってなんでしたっけ？」

早苗ちゃんと神奈子さまがこけてくれた。結構乗りいいんだ。

「じょーだんですよ～。私の今後についてで…あってますよね？」

「あぁ。」

「じゃあとりあえず
1幻想郷の生活に慣れる
2空を飛ぶ
3人里での就活ついでに守矢神社を布教の三本立てですかねぇ～。」

ベシッ！諏訪子様が勢いよく手を上げ私の顔に当たる。痛い…

「はいはい！私が空の飛び方を教えてあげるよ。」

「諏訪子様…それはうれしいのですが…お手が…」

「手？あぁ！ごめんアヤメ。」

「いえ、大丈夫です。」

ついでに諏訪子様をわしわし撫でて心を癒しておく。あ～う～とかかわいらしい声が出ているが気にしない。

「では後は3だな。…なぁアヤメこの神社で巫女をしてみないか？ここには妖怪もいるし自衛の手段を持っていた方がいい。」

「？巫女って自衛になるんです？」

「あぁ。…早苗見せてやりな、大丈夫幻想郷の方が術は操りやすい。現代で出来ていたお前はれっきとした規格外なんだぞ。」

「はい。…規格外（ボソッ）」

「「？」」

早苗ちゃんに連れられて境内へ出る。早苗ちゃん落ち込んでるなぁ前から現人神？だとかで周りから距離をとられてたふしがあるから特別扱いが嫌いだったからそのせいかな？

「早苗ちゃん元気出して。ここにはそんなことで距離をとる人なんていないんだから。」

「そう…ですよね。ではいきます！アヤメさん良く見ていてくださいね。」

早苗ちゃんが御幣を両手に持ち霊力を集めていく。へ～、あれが霊力なんだ～。淡い深緑色で綺麗…

「結っ！」

言霊にのせ霊力を行使する。キンッという音が聞こえ辺りが清浄な気に包まれる。…？

「早苗ちゃん？どうなったの？」

「周りに結界を張りました。よかった成功して…外では成功率が低くて不安だったんですよ。」

結界？どこにあるのか確かめようと早苗ちゃんから離れ、

ゴッ「～痛ぅ」

おでこに壁にぶつかった時の様な衝撃が走る。

「わわ！アヤメさん大丈夫ですか！」

「～大丈夫、大丈夫ちょっとたんこぶが出来ただけ…」

「大丈夫じゃないじゃないですか！ちょっと見せてください！」

早苗ちゃんにおでこを見せるとペシッと御札が貼られる…ちょっと

キョンシーの気分。

「治癒の御札です、使うときはこうやって字に沿って霊力を流せば発動します。覚えておいてください。」

「あ～、気持ちいいねこれ。」

「ふぅ治りました。次から気をつけてください。」

そういい早苗ちゃんが御札をはずしてくれる。御札は燃えていくようにぼろぼろ崩れていく。むぅ使い捨てなんだ、もったいない。

「うん、ありがと～。でもすごいねこれどうなってんの？」

見えない壁をぺたぺた触りながら早苗ちゃんに聞いてみる。

「簡単に言えば霊力で壁を作って結界の外とを切り離してるんです。いろんな限定できたりするんで応用力がある術なんですよ。これで弱い妖怪の攻撃ぐらいなら防げます。でも…」

「おーい。早苗ーアヤメーちょっとはなれてな～。」

神奈子様に言われ早苗ちゃんと結界の隅のほうへ移動する。なにするのかな～とわくわくしてると神奈子様は、どこかから取り出した御柱を構え…えっ！ちょっと！まって！思いっきり振りかぶって結界へとたたきつけた。御柱の当たったところから見えない壁にヒビが入りパリンッという音とともに結界が消えてしまった。

「こんな風に強力な攻撃をされると術が解除されるんだ。」

「神奈子様びっくりするじゃないですか！」

「ははは、すまんすまん。だが早苗成長したじゃないか見直したよ。」

「そっそうですか？って騙されませんよ！アヤメさんもいるんだからもう少し安全な方法でっ！」

「早苗ちゃん顔、顔。」

「あはははは、早苗顔ゆるゆるだよ～。よっぽど嬉しかったんだね。」

境内から見ていた諏訪子様がぴとっとくっ付いてくる。…だきしめてもいいんでしょうか？

「かっからかわないでください！もう遅いんですからご飯の準備してきます！」

「あ～あ、早苗すねちゃった。…ま、いっか。どう？家の巫女は凄いでしょ！今なら三食宿舎付。可愛い神様と男前な神様がついてくるよ！」

「誰が男前だ！」

「え？神奈子。」

「即答すな！」

「ぷっ、くすくす。今日からよろしくお願いしますね。諏訪子様、神奈子様。」

「「うん／ああ」」

「では早苗ちゃんを手伝ってきますね。たぶん電気も使えなくて苦戦してるでしょうし。」

ニコニコしながら、ゆっくり調理場のほうへ歩いていく。これから始まる刺激的で楽しい日々に胸を躍らせながら。…まずはあそこでおろおろしてる早苗ちゃんを何とかしないと。

雨、参拝ところにより反転（後書き）

はじめましてドライアイです。まずは読んでいただいてありがとうございました。なにぶん始めての投稿ですので、失礼な点などがありましたら言ってください。すぐに直します。
感想、アドバイス募集してます。良ければお願いします。

晴れ、修行の後ところにより混乱（前書き）

評価してくれた方感謝です。

晴れ、修行の後ところにより混乱

「さぁ、スワコのスーパー教室はーじまーるよー。」

「む？」

「は？」

「…ぐぅ。」

「あぁっ！もう、アヤメさん味噌汁もったまま寝ないでくださいよ。」

「や～ねむいの～、早苗ちゃんたべさせて～。」

「何で幼児退行してるんですか、しっかりしてください。」

早苗ちゃんにガクガクゆすられる。…むぅ、寝れない。

「お！この卵焼きいつもと味付けが違うな。」

「…どうですか？…私が作ったんですよ～。早苗ちゃんには負けるかもしれないけど。」

「いやいやいつもよりうまいよ。」

「アヤメさん本業だったじゃないですかー、比べないでくださいよ～。」

「ほぉ、そうなのか凄いじゃないか」

「…そうですか～。えへへ～」

「ちょっと待てーい！スルーしないで！せめて突っ込んで！」

ビクッ、ガンッ！痛い。…あれ？いつの間にごはんたべてたんだっけ？諏訪子様もなんでか怒ってるし、どうしたんだろ。

「すいません諏訪子様、でもいきなりどうしたんですか？」

「どうしたじゃないよ！昨日の話の続き！空飛ぶ修行するっていってたじゃん！」

「まぁまぁ諏訪子様、そんなに怒んなくても。どうぞ膝にお座りください人肌はおちつけますよ～。」

膝をぽんぽん叩き諏訪子様を呼ぶ、少し考えたようだけどぽすんと座ってくれる。…よし自然に座ってもらうことが出来た。うんやっぱり落ち着く。

「で、どうしたんだいきなり？」

「いいじゃんべつに～、ちょっとインパクトを持たせたかったんだよ～。」

「まぁビックリはしたな、反応できないほどに。」

「ええ驚きました、スルーしようと思うほどに。」

「？」

「むぅ、まあいいけどさ～。じゃあ早苗、アヤメご飯食べたら練習しよ、庭に集合！」

「「はい。」」

で庭にやってきたんだけど…なんで…諏訪子様スーツなの？

「あの…諏訪子様？その格好はいったい？」

「へへ～、いいでしょ～やっぱり物を教えるといったら教師だからね！」

「えぇすばらしいです。私の中の信仰心は諏訪子様がトップに躍り出ました。」

「アヤメさんは守矢神社の巫女なんですからお二方とも同じくらい敬ってもらわないと困ります。」

「はーい。すいませんです先輩。」

「せっ先輩はやめてください。」

「はいはい、じゃあ始めるよ！早苗は霊力の扱いはもう大丈夫だよ

ね？じゃアヤメ、霊力を認識する事から始めようか。」

「おお、私にも使えるんですね！」

「もっちろん！早苗より少ないくらいだけど一般人としては破格なんだよ、早苗だって昔から霊力を上げる修行をやってるから素質は一緒くらいかな。」

「おっ！もしかして私って凄い？」

「まぁ素質があってもうまく使えなきゃ意味無いけどね！んと私が神力でアヤメの霊力を対流させるからなんとなくでいいから認識できたらいってね。」

「わざわざ落とさなくてもいいじゃないですかぁ。」

諏訪子様が近くへ移動し私のおでこに手を当てようと…当てようとしてるけど届かなくてぴょんぴょんしてる。かわいすぎる…

「アヤメしゃがんで！」

「…はーい。」

「なんで残念そうなんですか？」

早苗ちゃんが何か言ってるけど聞こえなーい。おでこに手を当て諏訪子様が集中している。諏訪子様からうっすらと霧のようなもやが発生し私の中へと入り込んでくる。

「んむぅ。体の中で何かがうねっていて気持ちいいような気持ち悪

いような…。」

「へんな声ださないの、霊力の感覚はわかったようだね。じゃあ操作やめるから忘れないようにしてね。」

諏訪子様がおでこから手を離しうねっていた物が穏やかになる。…うん大丈夫わかる。

「どう？霊力の感覚はわかるかな？」

「はい、大丈夫ですよ。」

「うん、よろしい！じゃ次は霊弾だね。早苗見本を見せてあげて。」

「はい。」

早苗ちゃんが手を前にかざすと早苗ちゃんの霊力が手のひらに集まっているのがわかる。昨日よりはっきりとわかるのは私も霊力を使えるようになったからかな？

「はっ！」

ポンッ

「お～。相変わらず綺麗だねぇ。」

「えへへ、ありがとうございます。」

「うん、ＯＫじゃあそこの木に当ててみて。」

「はい。っや！」

はじかれた様に霊弾が木に向かって発射される…っえ？

バキバキッ！

折れちゃった…！？

「あははは…、幻想郷に来て霊力扱いやすくなってるから手加減覚えないとね。」

「うぅ、精進します。」

「よし、次アヤメやってみて。手のひらの前に霊力を集める感じで、集まったら早苗みたいに木に向かって打ってみてね。」

むむむ、霊力を集める…、集める…。

ぽんっ

おお何かで…た？

「あれ？何か出たような気がしたんだけどなぁ。」

「ううん、ちゃんと出来てるよ。」

「無色透明ですか？ちょっと景色がゆがんで見える程度ですね。」

「おお本当だ、何かあるような…早苗ちゃんみたいな色が良かったなぁ。」

「まぁ霊力の色は人それぞれだからね。うん、構成も大丈夫そうだね、じゃ打ってみて。」

よし！行け！放たれた霊弾はまっすぐ木に向かい命中するが、

「あれ？あたったよね？」

「霊力が弱くて破裂したわけでもなさそうですし…？」

「…木に霊力が飲み込まれた？でもそんな抵抗を感じなかったし…木と同化した？」

諏訪子様が何かブツブツつぶやいて当たった木を観察している。むぅ、うまくいったと思ったんだけどなぁ。

「すごいですね。外より霊力が扱いやすいとはいえ一発めで成功しちゃうなんて。」

「えへへ。そう？もっと褒めて。…でも霊力っていろんな形に変化できて面白いね。ほら熊〜、って見づらいけど。」

「くすくす、ぷー〇んですか？ほんと扱い上手ですね。私も始めはそうやって操作を覚えたんですよ、今日から常に霊弾を作って生活してみましょう。寝てるときも出来ていたら合格です。」

「むぅ、早苗はスパルタだなぁ〜。もっとやさしくしてくれてもいいんだよ。」

「ふふん、これもやさしさですよ！妖怪だっているんですからアヤメさんに何かあったら悲しいですもん。」

「まったく。そう言われるとやるしかないじゃない。でもそれはさなえちゃんもなんだからね。」

「ふふっ、わかってますよ。」

「うむ、ならよし！…あはははは」

早苗ちゃんと笑いあいながら練習してると、

「おーい二人ともちょっときて～。」

諏訪子様に呼ばれた。なにかわったのかな？

「諏訪子様、いかがですか？何かわかりました？」

「うん、まあね。二人ともこの木を見て何か気づくくこと無い？」

え？どこか変わったのかな？別にへこんでないし、傷もついてないし？

「あっ！ちょっと大きくなってます！」

「さっすが早苗良くわかったね。アヤメの霊力のおかげで少し成長したんだよ、たぶん霊力が木と同化して急激に生長させたってところかな。」

「え？でも普通はそんなことならないですよね？」

「まね、でも普通に霊力として機能してるから大丈夫そうだし。この話は夕食のときにでも神奈子とゆっくり考えてみよ。」

「…そうですね。すぐにわかることでもないですし…アヤメさんどうかしました？」

「…うん、さっぱりわかんない！」

よし！きっぱり言ってやった。二人がこけてるけど気にしない気にしない。

「まあ大丈夫ってわかったんならいいじゃない。すっわこさっま、そーらを自由にとびったいな～。」

「はい！タケコプター。」

「「あるんですか！？」」

「ないよ。…早苗まで釣られちゃって。」

「仕方ないじゃないですか、タケコプターは永遠のあこがれですよ！」

「はいはい、それじゃ空の飛び方を教えるね。まず霊力で全身を包み込むようにして、持ち上げるようにするんだよ。見てて。」

おお、諏訪子様が空を飛んでる。すごい！すごい！

「まあこんな感じかな。じゃ、やってみよっか。」

「あっ、でももう夕食作らないと…。明日にしましょうか、アヤメさん手伝ってくれますか？」

「賛成ー。もうおなかペコペコだよ～、霊力っておなかすくんだね～。」

「霊力も自分のエネルギーのひとつだからね。慣れてくれば大丈夫になってくるよ、体力と一緒だね。」

「は～い。じゃ早苗ちゃん準備しよっか。」

「はい。…アヤメさん霊弾忘れてますよ。」

「うぇ～い。」

むぅ、霊弾作りながら料理って難しい…。痛、指切っちゃった。霊力を集めて～

「ああ！アヤメさん指切っちゃったんですか！早く消毒しないと…え？」

「よし！治った～。さっすが霊力わけわかんないけど凄い凄い。…どうしたの早苗ちゃんありえないものを見るような目をして、ちょっと怖いんだけど。」

「…ちゃんと治ってますね。アヤメさんどうやったんですか？」

「え？ほら前治癒札でちゃんとなおったでしょ。だから霊力集めて治れ～治れ～って思っただけだよ？」

「ありえません！治癒札は霊力を癒しに特化した気に変換することで、傷口を活性化させて治すものなんですよ！霊力のみでは出来ないはずなんです！」

「でっでもちょっとした切り傷くらいだし…ああ！フライパンが焦げかけてる！早苗ちゃん話は料理の後々。二柱？二人？とにかく諏訪子様と神奈子様に相談してみよ。」

「二人でいいと思いますよ。…そうですね。食材を無駄にするわけには行きませんし、後にしましょう。」

ほっ、あぁ怖かった。早苗ちゃん興奮すると怖いだよね…うん、料理も大丈夫。何とかなりそ。

「おお今日も美味しそうだな。」

「今日はビーフストロガノフですよ～。私の得意料理なのです。偶然材料があったんですよーでもなんでサワークリームがあったんでしょう？早苗ちゃんに聞いてもわからないって言うし。」

「ビーフ…？まあ美味ければいいか。で諏訪子アヤメたちの修行は

どうだったんだ？」

「もぐもぐ…んぐ、アヤメこれ凄く美味しー。…お酒にも合いそう（ぽそっ」

「ありがとーございます、でももう材料が無いんですよね。人里にあればいいんですが。」

「酒か、確かに合いそうだな…早苗、お神酒がまだ合っただろ。少しでいいから持ってきてくれないか？」

「はぁ…わかりました。少しだけですよ。」

「アヤメたちの修行はちょっと変な事があったから、食べ終わった後でゆっくり話すよ。神奈子の方はどうだったの？今日は天狗たちと会合だったんでしょ。」

「変な事？…とりあえず神力が戻るまでお預けだとさ。まぁ二日くらいで全盛期の半分くらいの力がもどるからそのときに認めさせるさ。」

「さっすが神奈子、おっとこまえ～。」

「そのネタ引っ張るつもりか！」

「でも神奈子様かっこよかったですよ。」

「そっ、そうか。」

うわ神奈子様照れてる。普段はかっこいいのに可愛いなんて反則で

す！

「あぁ神力といえば「お待たせしました。」おっ！お酒が来たようだね。話しは後々、早苗ー、ちょっとちょうだ～い。」

「く～、うまい！美味い料理に美味い酒、これだけで幻想郷にきてよかったってもんだ。」

「はぁ～、神奈子わからなくもないけど親父くさいよ。」

「おやっ。親父言うな！」

―少女（親父）食事中―

「で？修行中になにがあったんだ？」

「えっとね～、かくかくしかじかで。」

「ふむ、まるまるうまうまという訳か。」

「「「うそっ、通じた！？」」」

「って、何で諏訪子様まで驚いてるんですか。」

「いやっ、ほんとに通じるとは思ってなくて…。」

「なにを言っている？零弾が当たった木が生長したのか…」
「本当に通じてる！？…神奈子様実は料理中にアヤメさんが指を切ってしまって、霊力を集めるだけで治してしまったんです。」
「霊力を集めただけでか…。アヤメ何か自分のかなにか能力を感じないか？」
「能力を…感じるですか？」
「ああ、まあちょっと考えてみてくれ。」
能力、能力？む～…おっなんかあるよーな？
「自然と同化する程度の能力？」
「ほぉ、自然と同化する程度の能力か…また難儀な能力だ。」
「霊弾は木と同化して力を与えて、料理中のは自分を木と同化させて同じく霊力で活性化させたってところかな？」
「ああたぶんそんなところだろう。」
「「？？？」」
「くくくっ、二人ともわからないって顔だな。まぁ使っていくうちに何が出来るか覚えておけばいいさ。」
「そだねー、すぐに理解する必要もないしねー。」

？よくわかんないけどお二方がそういうなら問題ないんだ。ゆっくりのんびり理解していこおっと。

「あっ、そうそう。神奈子神力のことだけど。」

「うん？」

「アヤメにくっついてるとね～、神力の回復が早くなるんだよー。」

「なっ！」

「私はもう全盛期の半分くらいは回復したしねー。」

「なんでそれを先に言わない！よし！アヤメ今日と明日一緒に寝るぞ！」

「かかか神奈子様！なにいってるんですか！」

「むぅ、いいですけど…私寝相悪いですよ、おもいっきり抱きついて甘えますよ！」

「アヤメさんまで！」

「まぁまぁ早苗。本人同士が納得してるからいいじゃない。」

「くっ、ですが！」

ふふん今日の夜が楽しみ～、おもいっきり神奈子様に甘えよっと。

「くくくっ、神奈子別の意味で抱いたらだめだからね！」

「すすす諏訪子！何を言っている！」

「諏訪子様！何を言ってるんですか！」

「おやおや～、慌てるとはあっやしいにゃ～。アヤメ今日は気をつけたほうがいいよ。」

「「諏訪子ー！／諏訪子様！」」

にゃはははと意地悪く笑いながら諏訪子様が逃げていき、ほかの二人が追いかけて行っちゃった。…寝る準備しておこうかな。とりあえず布団に入る前に「不束者ですがよろしくお願いします」って言ってみよう。きっと可愛い神奈子様が見れるはずだ。

晴れ、修行の後ところにより混乱（後書き）

おはこんにちばんわ、ドライアイです。
今回は神奈子様といちゃいちゃする回です。…まぁ嘘ですが。
感想、アドバイスどうかよろしくお願いします。

晴れ、異変の足音ところにより命の危機（前書き）

１１／７誤字修正。

晴れ、異変の足音とところにより命の危機

んむぅ…揺すられてる？まだ眠いー！…あっ抱き枕だ～あったかーい。わっ柔らかーい。スリスリ

「こっこらアヤメ、寝惚けるなこら！あんっ、胸に顔をこすり付けるな。」

ゴン！

いっったー。なに？なに？頭に何か硬いものが当たったような…

「あっ神奈子様おはよーございますー。…なんで真っ赤な顔でこぶしを振り上げてるんです？」

「あぁおはよう、…まあ気にするな。」

「そうですか？…神奈子様なんだか頭がずきずきするんですが知りませんか？」

「き・に・す・る・な。」

「はっはい。」

なんでそんな怒ってるんだろ？…あっそうだ

「神奈子様さっきこの辺にすっごく気持ちいい抱き枕ありませんでしたか？ふかふかで～あったかくて～いい匂いまでするんですよ。」

「しっ知らん！ほら早苗が待ってるんだ早く行ってやれ。」
「はっはい！…神奈子様お顔が真っ赤ですよ、大丈夫ですか？」
「～～～～っ早くいけー！」
「はっはい～。」

「ってな事があったんですよ～。神奈子様いきなり大きな声出すからビックリしちゃった。」
「そうなんですか、でも神奈子様の部屋に抱き枕なんてありましたっけ？」
「ふふん、私知ってるよー。アヤメどうしても欲しかったら神奈子と一緒に寝ることだね。あれは神奈子専用だから。」
「む～、そーなんですかぁ。ねえ神奈子様、今日だけじゃなくてまた一緒に寝ましょうよ。」
「うぅ、そっそうだな。」
「ねっ、神奈子。」
「なんだ？」

「昨日はお楽しみでしたね。」

「〜〜〜諏訪子！表に出ろ！」

「クスクスッ、いいよ。弾幕ごっこの練習だ！」

「諏訪子様！神奈子様！まだ食事中です！後にしてください！」

「「はっはい！」」

わー早苗ちゃん強〜い。何かどす黒い霊力的な物も出てるし…怒らせないようにしないと…。

「アヤメさん。」

「ひゃい！」

「？、どうかなさいました？」

「ぅううん。なんでもないよ何でも。どうしたの？」

「食べ終わったら昨日の続きしましょ。もうそろそろ食料も尽きますしもうそろそろ死活問題ですよ。」

「そうだね、がんばらないとね。」

「じゃ決まりですね。」

「…あら美味しい。」

「誰です！」

「あらあらそんなに殺気立たなくていいの。ただの神隠しの主犯で妖怪ってだけですのに。」

…それは安心できないなぁ。というかいつの間に？

「うわ～凄い美人さんだ～。綺麗な金髪でしかもさらっさら。」

「うふふ、ありがとう。」

でもなんだか胡散臭そう…言わないけど。しっかしなんだかエッチな人…なんでネグリジェ？なんだろう。むぅ大きい。

「アヤメさん何でそんなに落ち着いてるんですか！…胸を凝視しないでください、そんな雰囲気じゃないんですよ。」

「あはっあはは。やだなぁそんな失礼な事しないよぉ。」

「じゃあなんで目をきょときょとさせてるんですか！」

「うふふ楽しい子達ね。」

「…そうだろ。一緒にいて退屈なしないんだよ。しかしつまみ食いは感心しないな。…で？今日はどうしたんだい八雲の？」

「まぁまぁそんなに急がないの。まずは初めての子達に挨拶しないとね。はじめまして神隠しの主犯八雲紫よ。ちなみにそこの二人に幻想郷のことを教えたのも私よ。ゆかりんってよんで♪。」

「はじめまして、東風谷早苗です。このたびは二人に新天地へ移る機会を与えていただきありがとうございます。」

「はじめまして、池水アヤメです。二人が生きていける場所を提供してくださり感謝いたします。」

「あらあら礼儀正しい子達ね。でもそんなに畏まらなくてもいいのよ。もっと砕けてたほうがうれしいわ。」

「そうですかでは、…よろしくね、ゆかりん！」

ビシッ！！

あれ？みんな固まってる？…あっ、でもゆかりんだけキラキラした目で見てくれてる。

「ねね、ゆかりんゆかりん。みんなどうしたの？」

「さっさあ？…本当にゆかりんって呼んでくれるの？」

「え？かわいいじゃないですか～、ゆかりん。それにお似合いですよ！」

「ほんとに！本当にそう思ってくれる！？知り合いに言ってみたら似合わないとか、もうちょっと歳を考えた方がいいんだぜ。とかい

ってくるのよー。」

「そうなんですかー、ゆかりんこんなに綺麗で可愛いのに不思議ですねぇ。」

「〜〜〜ぅ、この娘いい子、ほんとにいい子。神奈子！アヤメはもらっていくわ！」

わわ、ゆかりんに抱きつかれちゃった。

「駄目に決まっているだろ！何をとち狂ってるんだお前は！」

ゆかりんの言葉にキレた神奈子様が御柱をフルスイングして…って駄目！

「結っ！」

キキキン、ヒュゥン！ガシャーン！！。

ほっ、良かった結界二枚も割れちゃったけどなんとかなった。神奈子様もきちんと手加減してくれたみたい。

「駄目ですよ神奈子様、御柱で殴ったら手加減していてもゆかりんでも痛いんです。めっ！ですよ。…ゆかりんも悪乗りしないで、もう少し落ち着いてください。」

「「ごっごめんなさい」」

「うん、よろしい。」

「アっアヤメさん、いつの間に結界を。」

「凄いじゃないアヤメー。いつの間に多重結界なんて出来るようになったの？」

「へへー、二人を驚かせるために昨日神奈子様に教えてもらってたんだ～。覚えたてだけど出来てよかった～。」

「…はぁ～。で八雲の本題は何なんだ？」

「…そうね本題に入りましょう。貴方達には異変を起こしてもらいます、内容はそちらで決めてもらってかまいません。

・この異変で幻想郷に貴方達の存在を示し、余計な混乱を防ぐ意味合いがあります。

・今の幻想郷では神社は結界の要、博麗神社しかありません。そこに新たな神社が加わると混乱は必至、きちんと神社間の上下関係を築く必要があります。

・この山の天狗たちにもそこで貴方達の力を計る場としてもらうことになっています、話は私達の方で通しておきました。

・異変を起こす時期は早ければ早い方が好ましいです。

・それと人里へは混乱を防ぐため異変を起こすまで立ち入りを禁止します。」

「異変の開始時期はこちらで決めても良いのだな？」

「それはかまいません。」

「ねぇゆかりん、食材が切れそうだから人里で買い物したいんだけど…だめ？」

「ふむ…、一ヶ月分の食材はこちらで提供します。」

「では、異変開始は3週間後だ。内容は博麗神社へ信仰戦争の宣戦布告をする。…八雲の、かまわないな？」

「ええかまいませんわ。…ふぅこれで何とかなりそうね。あ～シリアスは疲れるわ～。」

「おいおい、それでも妖怪の賢者様か？」

「それは人里の人間が勝手に言いふらしただけ、私は一言もいってませんわ。」

「…ねぇねぇゆかりん、もう用事は終わったんだよね？じゃあ朝ごはん食べてかない？ちょうど作りすぎてたんだよ。」

「あらそぉ？それじゃご相伴にあずかろうかしら？」

「うん！すぐ持ってくるね。」

ゆかりんの了承を得て私は調理場へと駆け込んでいく。

「おっまたせ～。今日は洋風にマヨ入り卵焼き、早苗ちゃん特製のお味噌汁。サラダに昨日作っておいたフォンダンショコラだよ！召し上がれ！」

「…美味しいわ。やっぱりうちに来ない？」

「む！やはりこちらもごちそうしておくか？」

ブオン！ブオン！素振りしている神奈子様。

「神奈子様！食事中ですよ、ほこりが舞うからやめてさい！」

「あぁすまない。」

「ご馳走様でした。…とても美味しかったわ、ありがとう。」

「えへへ～、いえいえこちらこそ。」

「じゃ私もう行くわね。」

「あぁ何から何まですまんな、アヤメはやれないがまた来るといい。」

「絶対きてくださいね、ゆかりん！」

「ええ、またね。」

グパァ。

能力で作ったであろう裂け目（大量の目がこちらを見ていて少し気持ち悪い）にゆかりんが入っていくと同時に裂け目が閉じた。

「よし！早苗ちゃん修行するよ～、がんばらないとね！」

「はい、まずは空の飛び方ですね！」

「うんうん、早苗たちは大丈夫そうだね。」

ガシッ！

「あの～神奈子？なんで私の頭を掴んでるのかな～なんて。」

「ククククク、我をからかったこと。忘れたとは言わせんぞ！楽しい楽しい弾幕ごっこをやろうではないか。だがなにぶん久しぶりの全開なのでな加減を間違えてしまうかもしれん。」

「神奈子キャラ違うキャラ違う。…いやあああぁぁぁ。」

黒い神奈子様が諏訪子様を鷲掴みしながら上空へ飛んでいく…

「あーもうあんな遠くまで。ねえ早苗ちゃん諏訪子様大丈夫だよね？」

「だ、大丈夫だと…思いますよ…たぶん。」

「そ、そうだよね大丈夫だよね…たぶん。」

…諏訪子様が飛んでいった方向へ合掌。…あれ？神奈子様の弾幕がさらに強化されたような…？気のせい気のせい、気にしない気にしない。ワタシハナニモミテイナイ。

「じっ、じゃ私達も修行しよっか。」

「そ、そうですね。」

「よし、始めよ。えっと霊気を全身に包み込むようにして…持ち上げるように飛ぶ！」

グイっと体が持ち上がる感じはするのに持ち上がらない…むぅ力が足りないのか…イメージ不足なのか…

「わっわわ、これ。バランスが、とりにく、い。きゃあ！」

「おっと。大丈夫？」

空中でバランスを崩した早苗ちゃんが落ちそうになるのを、何とか受け止める。

「あ、ありがとうございます。」

「凄いじゃない早苗ちゃん、一発で成功するなんて。私なんか全然飛べないのに…。」

「当たり前です。私は外で霊術に慣れるように修行し続けて来たんです、ですから少しでも差が出てくれないと報われませんよ。二日で全身に霊力を纏える様になっただけでも私からしたら羨ましいくらいなんです。ですからゆっくり焦らず頑張りましょう。」

「…うん！そうだね私は私のペースで頑張るよ。ありがとう早苗ちゃん。」

「あっいえ、そんな。どういたしまして。では修行に戻りますね、お互い頑張りましょう。」

少し離れて、霊力を纏いバランスに気を配りながら慣らして行く早苗ちゃん。むぅ、ああは言ったけどやっぱり羨ましい。

…あっ！能力で空気と同化してみれば軽くなって浮けるかも…？。でもどうやって同化すれば？同化…一緒？。空気と一緒になれ～なれ～。

「おぉ、出来た出来た。早苗ちゃん私浮いてるよ～。」

ビュォオオオー

「え？嘘っ！風に流され…きゃあああぁぁぁ。」

「はぁ、凄い風でしたねアヤメさん。…アヤメさん？あれ？どこにいるんですー？アヤメさ～ん？」

う～、どうしよー。あっ、能力解除すれば…駄目だ下に落ちちゃう…。全身に霊力を纏って、…打つ！あっ、違う違う打っちゃ駄目だ。

「きゃん！いった～。何なんですかいきなり！」

「わっ！当たっちゃった！…ごめんなさいごめんなさい！」

「貴方ですね！降りてきなさい！」

「うぅ～ごめんなさい。降りられないですよ～。」

「？なにを言ってるんです？」

不思議そうな顔をしながら翼を広げ飛んできてくれた。良かった、いや当たったのはよくないけど不幸中の幸いです。

「うぅごめんなさい。」

―少女説明中―

「ふむ、なるほど…空気と同化ですか、なかなか面白い能力ですねぇ。巫女服…ということは最近山頂に来た神社のですか。まぁ悪気は無いようですし今回は許してあげます。」

「ありがとうございます。」

「ただし！次は無いですからね。」

「はひ！肝に銘じておきます！」

「よろしい。…では少しお話を伺いたいので一旦下に下りましょうか。ほら手を貸してください。下までつれていってあげます。」

「うぅお世話になります。」

ほっ、一時はどうなることかと思ったけど何とかなりそう。…この人（？）翼生えてるし…頭襟（ときん）に結袈裟（ゆいげさ）それに一本歯下駄…山伏さん格好と一緒だし…もしかして天狗さん？こんなに可愛いのに？

「さぁ着きましたよ。まっ、ここで座って話しましょう。」

「はい。私は守屋神社で新米巫女をしております、池水アヤメと申します。助けていただいてありがとうございました。」

「あややぁぁ。これはこれはご丁寧に、私は烏天狗の射命丸文です。お見知りおきを。…では早速、取材をさせて貰ってもよろしいですね！」

「取材ですか？」

「ええ、実は私文々。新聞という清く正しいをモットーに新聞を作ってるんですよ。どうですか一部購読してみませんか？」

「へ～そうなんですかー。むぅ、残念ですがまだこっちのお金持ってないんですよ～。人里と交流出来るようになればお願いします。」

「むっ、そうですか残念です。その際はぜひご贔屓に。…で取材の件は？」

「もちろんＯＫですよ～。射命丸さんにはご迷惑かけちゃいましたから何でも聞いてください。」

「文と呼んでください。苗字では言いづらいでしょう。」

「いいんですか？では文ちゃんで！」

「ちゃ、ちゃんですか！？あの出来ればちゃんは…。」

「はじめは文さんにしようかと思ったんですけど、やはり文ちゃんは凛々しさより可愛さの方が強いのでちゃんなんです。」

「か、かわっ！へっ、変な事言わないでください！」

そういいながら紅くなってる文ちゃん。うん、やっぱりちゃんだ。

「くっ、ここで反論しては先に進みません。やむ終えません、…ちゃんでいい…です。」

「はいっ♪よろしくね文ちゃん。」

「むぐぐっ、では取材を開始します。」

―少女取材中―

「そうですか。…貴方も変な人ですね、いきなりこんな辺境の地に連れて来られて文句ひとつ言わずニコニコしてるなんて。」

「あはは、そう言わないでくださいよ～。私だっていろいろ考えているんですから。でも悩んでどうにかなる問題じゃないし、くよくよするより楽しい方がいいじゃない。」

「そういうものですか。」

「そういうものなんです！…ふふっ」

「「あははは／えへへ」」

「まったく面白い人間ですね、気に入りました。では取材はこれで終わりです、おつかれさま。じゃついでに神社へ送って行ってあげましょう。」

「ありがとうございます。実はどうしようかと。」

はぁー。良かった～帰りはまた風で気球みたいに飛ばなきゃいけないのかと不安だったんだ～。

「ではお姫様お手を。」

「ひっ姫！？…エスコートお願いしますね王子様。」

「…えぇお任せください。」

あ～驚いた。でも文ちゃんの顔が少しだけ紅くなったの見逃しませんよ。やっぱり凛々しいより可愛い…。

「アヤメさ～ん。」

「アヤメー。」

「アヤメー！くそっこうなったら山を丸裸にしてでも！」

「神奈子手伝うよ！」

「アヤメさ～ん。」

うわっ！早苗ちゃん泣いてる！諏訪子様と神奈子様、すっごく殺気立ってるし…

「…行くのやめません？」

「いや、でも私の心配してくれてるんだし…。気持ちはわかるけど」

「愛されてますね。」

「…ええ。自慢の家族です！」

「では行きますか。あれでもこの状況って、勘違いされると「あっ、アヤメ。…烏、貴様！アヤメをどうするつもりだ！」あやややや。」

「ちょっと待ってください。諏訪子様！ってきゃ～～～～。」

文さんが手を引っ張り猛スピードで逃げ出す。

「文さん。どうしたんですか！？戻って説明しないと！」

「後ろ見て後ろ！あんな弾幕くらったら死んじゃう！」

おそるおそる後ろを見てみると、…そこには空を覆うほどの弾幕を構えた諏訪子様と神奈子様が…手加減、して、くれてます、よね…。

「「ア・ヤ・メ・を・返・せー！」」

「「きゃ～～～～！」」

「早苗ちゃん起きて！二人を止めて！」

「あやめさ～ん。」

「駄目だ！完全に塞ぎこんでる！」

…あの後のことは良く覚えていない、幻想郷の危機を感じ取ったゆかりんが二人を正気にしてくれたらしく。私はゆかりんにすがり付いて泣いていて、文ちゃんは深く暗い目をして何かブツブツつぶやいていた。

そんな私達に向かって3人が伝家の宝刀「ＤＯ★ＧＥ★ＺＡ」をしていた。…私と文ちゃんが正気に戻れるまで丸1日かかったが、山の天狗の大将、天魔様が見ていたらしくお二人の実力が認められ天狗との交流が開始された。

よかったのか悪かったのか、…確実に悪かったと思います。はぁ、文ちゃんに謝りに行かないと…

晴れ、異変の足音ところにより命の危機（後書き）

おはこんにちばんわ。
ドライアイです。今回は長文が多く読みにくかったかも…精進します。
感想・アドバイスよければお願いします。

晴天、謝罪ところにより暴走（前書き）

１１／８変なところで改行をしていたのを修正。

晴天、謝罪ところにより暴走

「ア…アヤ…アヤメ起きて。アヤメ！」

「…おはよ～ございますー。」

諏訪子様わざわざ起こしに来てくれたんだぁ。むぅ、まだ眠い。あ…そうだぁ。

「やぁっと起きたね、まったく。ほら早苗が呼んで、…わ！」

何か言ってる諏訪子様を布団の中へ引きずり込む。えへへ～諏訪子様あったかーい。ぎゅ～

「まだ眠いんです～。諏訪子様も一緒に寝ましょうよ～、諏訪子様も一緒ならきっと怒られませんよ～。」

「だっ駄目だよ！早苗が呼んでるんだから。」

「さなえちゃんが～？」

「そうそう！朝食作るの手伝って欲しいんだって！」

「お料理～？」

早苗ちゃんが…お料理？早苗ちゃんをお料理！？

「それはいけません！駄目ですよ諏訪子様、いくら早苗ちゃんが食べちゃいたいくらい可愛いからって本当にたべてはいけません！」

「何の話!?ほらちゃんと起きて!朝食期待してるよ。」

「あれ?朝食?早苗ちゃんを料理するのは?」

「しないしない。まったくこのねぼすけは、…ほら顔洗ってきな。」

「はーい。」

今日の朝食何にしようかな〜

「アヤメさん今日はお客様が来てますから、3人前多く作りましょう。」

「お客様?誰か来てるの?」

「ええ紫さんと、狐さんとネコさんが。」

「あっ!ゆかりんきてくれたんだ〜。狐さんとネコさん?」

「まぁ会ってみればわかりますよ。さあ、お待たせしてはいけません。ささっと作っちゃいましょう。」

「うん!腕によりを掛けちゃうよ〜。目標はゆかりんを蕩けさせる

くらい美味しい物！」

「ふふっ、がんばりましょう。」

―少女全力料理中―

「おっまたせしましたー。今日の献立はぶりの照り焼き、おひたし、お味噌汁にお漬物！私達の得意料理和食で統一して…みま…した。」

「？、アヤメさんどうかなさいました？」

早苗ちゃんの声に反応できない、【その人】を見た瞬間私の中で音が消え、その一点から目を離せなくなる。

～藍～

「紫様、やはりご迷惑なのでは？」

「いいのよ、昨日頼まれた食料を届けに来たついでにご飯に誘われただけじゃない。気にしすぎ。」

「ですが…。」

向かい合っている二人の目が厳しい。…まあ朝の家族団らんにいきなり3人も来られたら厳しくもなるだろう。

「それにここのご飯美味しいのよね～、貴方と橙にも食べさせたくって。」

はぁ、やはり始めから朝食が目的だったか。いつもならこんな雑務は私にお任せになるのに、それに橙も連れて行くと言うから変だと思ったんだ。…美味しい物を私達にも食べさせたいと言うのは、素直にうれしいが。

「おっまたせしましたー。今日の献立はぶりの照り焼き、おひたし、お味噌汁にお漬物！私達の得意料理和食で統一して…みま…した。」

今朝見た風祝とは違う巫女が入ってきた。手に持った料理から美味しそうな香りがただよう。…これは、確かに。ゴクッ、おっとはしたない。？巫女と目が合った瞬間固まり真剣な顔でこちら凝視している。

「？、アヤメさんどうかなさいました？」

風祝が声をかけそれに反応したのか配膳をし自分の席に座る。その間もじっとこちらを見ている。

「藍、貴方アヤメに何かしたの？」

「いえ、初対面のはずですが…」

「そう。…どうしたのかしら？…まぁいいわ自己紹介しなさい。」

「はい。私は紫様の式、八雲藍と申します。このたびはお誘いいただきありがとうございます。…ほら橙も。」

「はっはい…。藍さまの式、橙です。よっよろしくね！」

場の雰囲気に緊張しているのか私の尻尾に抱きついてくる橙。…可愛い。…心なしか巫女の目が厳しくなった気がする。

「早苗、アヤメ私達はもう挨拶したから。挨拶しなさい。」

「はい、はじめまして、東風谷早苗です。早苗とお呼びください。よろしくね橙ちゃん。」

「はじめまして、池水アヤメです。よろしくお願いします。」

早苗が緊張を解そうと橙に声を掛けてくれるが、アヤメのどこか機械的な声にさらに怯えていしまう。

「アっ、アヤメ？どうかしたの？」

諏訪子様が緊張に耐え切れなくなったように声を掛ける。アヤメは意を決したように口を開き……。

～アヤメ～

くっ、もう我慢できない。

「らっ！藍さん！」

「はっはい！」

ここは全身全霊を賭け…伝家の宝刀を抜く。

がばっ！

「どうかそのもふもふ尻尾を触らせてください！」

「「「「「「は？／え？」」」」」」

なんで全員ぽか～んとしてるの？いやっそんなの気にしていられない。私の目にはもうあの黄金のもふもふ尻尾しか映っていない！

「お願いします！どうか！どうか！」

頭をこすり付けんばかりに伝家の宝刀「ＤＯ★ＧＥ★ＺＡ」をする私。情けないような気はしないでもない…。

「あっああ、いいぞ？」

「やった。」

藍さんの了承を得て尻尾に飛びつく。うわ～見た目以上にもふもふ～つやつや～。こっこれはいいものだー。

「あっだめ！藍さまの尻尾は私の物なんだから！」

「え～でも、こんなに気持ちいいんだよ。独り占めかっこわるい！」

「む～。」

そこまで言って気づく、猫耳！しっぽ！くっ、かわいい！

「わかった、今日はこれくらいにしておくから頭撫でさせて！」

「なんで！？…む～、わかった、撫でていいよ。」

了承を得、橙ちゃんの頭を撫でる。…始めは戸惑っていたけど、気持ちよさそうに尻尾を絡めてくる。

「うわ～かわいい～。ゆかりん家美人さんばっかりだし、かわいい娘もいる。…私の幻想郷はここにあったのか！」

「アヤメ落ち着いて！ここは幻想郷だよ！…ひッ！」

「…ア・ヤ・メさん、そこに正座しなさい！」

「「ひゃい！」」

「あぁ橙ちゃんはいいんですよ。すこし藍さんのところに行っててください。」

「うっうん！」

あぁ橙ちゃんが行っちゃった…。うぅ、なんで早苗ちゃんそんなに怒ってるの？例のどす黒い霊気も出てるし…

「いいですかアヤメさん！初対面の方になんて失礼な事を！それにあんな真剣な顔で心配するじゃないですか！くどくど……。」

うっ、泣きそう…。しかたないじゃない…あんな尻尾見せられたら…。早苗ちゃん怖い…。

「早苗、そのくらいにしておきなさい。せっかくの料理が冷めてしまう。」

「む！そうですね、これくらいにしておきます。」

「うわ～ん、ありがとー神奈子様ー。怖かった～。」

「ア・ヤ・メさん！」

「はい！反省してます。」

「ぶっ！くくっ、いやすまない。」

「ではいただこう。」

「「「「「「いただきます。」」」」」」

「…うん！やっぱりおいし～。」

「確かに美味しい…。」

「藍様っ！藍様っ！おいしいですね！」

やったね！…早苗ちゃんもうれしそう。

「ふふ、そういっていただけるとうれしいです。」

「えへへ～、ゆかりんが新鮮な食材を持ってきてくれたからですよ～。」

「いや、食材が有ってももここまで美味しくするのは料理人の腕だ。誇っていいと思うぞ。」

「褒めても何もでませんよ～。…あっプリンいかがです？ゆかりん印の新鮮タマゴをふんだんに使った、ほっぺが蕩け落ちる一品ですよ～。」

「ふふふっ、もらおうか。」

「あら？私には無いの？」

「あの…あの、私も…」

「もっちろんありますよ～。あっでも3人分しかないので神奈子様と諏訪子様はおあずけです。」

「「ええ～。」」

「かっ神奈子様まで…、これは先日ご迷惑をおかけした文さんへ持っていく物なのです、我慢してください。」

「明日も作るから今日は我慢してください。」

「「…わかった。」」

「んふふ～どうですか？私特製の一品なのですよ～♪」

「「お～い～し～。」」

「これは…うまい…。」

「やった！」

「ふ～、ご馳走様。」

「「お粗末さまでした。」」

「ごちそうさま。今日も美味しかったわ、また来るわね。」

「今日はご馳走になったな、こんどは家に遊びに来るといい次は私がご馳走しよう。」

「またね！」

「うんまたね！今度は一緒に遊ぼうね橙ちゃん！」

「うん！」

グパァ

八雲家の人たちはスキマには入り帰っていった。あの中どうなってるんだろ？目だらけ…とか？怖っ！

「アヤメ～。？何で震えてるの？」

「いっいえ、気にしないでください。」

「？。…まいっか、アヤメ天狗のところへはいつ行くの？」

「空を飛ぶ練習しないといけないしお昼からかな。どうかなさいました？」

「あの天狗には迷惑を掛けたからね、もって行って欲しい物があるんだ。…行く前に私の部屋によってちょうだい。」

「わかりました。では練習してきます。」

「うん、がんばってね。」

「はい！」

「早苗ちゃん、絶対離さないでね。」

「ふふふ、大丈夫ですよ。」

私達は今、守屋神社の上空にいる。練習のため早苗ちゃんに運んでもらったのはいいんだけど…怖い！こんな高さから落ちたら死んじゃう。

「絶対！絶対だよ！」

「はいはい。…でも手を離さないでどうやって練習するんです？」

「それは…頑張って。…あっ！何手を離そうとしてるの！うらぎり

もの～、人殺し～。」
「人殺しって…。」
絶対離されないように早苗ちゃんにすがりつく。…外ではおねえちゃんぶってたけど、もうそんなのどうでもいい！
「あっ！どこ触って！…アヤメさん落ち着いて！」
「ふぅ～！ふぅ～！」
「ほらほら落ち着いて、はい深呼吸。吸ってー吐いてー。」
「すぅ～、はぁ～」
「落ち着きました？」
「うん…。」
「大丈夫ですよ、昨日のように風に流されても私が助けますから。」
「ほんと…？」
「あれ？わたしが信用できませんか？」
「出来るけど…。」
「それじゃ離しますね。」
「うん。」

むぅ、早苗ちゃんの方がお姉さんみたいだ…。こんど早苗おねえちゃん♪って呼んであげることにしよっと。きっとビックリしてかわいい早苗ちゃんが見れるはず…。あっ落ち着いてきた、早苗ちゃんは偉大だな～。

霊力を全身に纏い、飛ぶ準備をする。よしっ、これで持ち上げるように…？。あれ？今の私は空気と一緒になってるんだから…

「アッアヤメさん！流されてますよ！」

「わぁ、早苗ちゃ～ん助けて～。」

「大丈夫です。すぐに捕まえられる所にいますから、そのまま練習してください。」

うぅ、早苗ちゃんスパルタ～。ってこんなこと考えてる状況じゃなかった！えとえと、空気と一緒になってるんだから！行きたい場所へすこし力を加えてやれば！

「わっやった～。早苗ちゃん！飛んでる！飛べてるよー！」

「ふふっ、良かったですね。」

「えへへ～。」

わーい、宙返り～トリプルサルコー、高速スピン！うっ。

「どうかなさいました？」

「ぎもぢわるい…。」

「わぁ！一旦降りましょう！」

「うん…。」

ちょっと調子に乗りすぎた…。でもこれで文ちゃんの所にいける！

「ってなことで来ました～。」

「えっとどういう訳？…まあいいや、もって行って欲しいのはこのお酒。高かったんだよ～。」

「あっこれ純米大吟醸の久保田…ごくりっ。」

「あれ？その反応、いける口？」

「え？いやぁあはは。」

「異変の後は宴会になるらしいから。一緒に飲もうね♪」

「はい♪」

「…あれ？でもアヤメまだ成人「早速届けてあげないと！」あっ！こら！」

さって早速届けてあげないとね～。諏訪子様が何か行ってた気がするけど、たぶん気のせいだよね！文さん家～文さん家～？。あれ？私文さん家知らない！？

「む！貴様何者だ！ここは天狗の「文ちゃ～ん。」文様？あっおいなぜ泣く！？まって泣かないで！？え？え？どういうこと？あぁもう説明して！事としだいではつれてってあげるから、ね。」

―少女説明中―

「あぁ、あの神社の。…わかった。連れてってあげるよ。」

「うぅお世話になります。」

「まったくどうして家もわからないのにどうやって着くつもりだったのか…。」

「面目ございません…。」

「まあいい、ほらこっちだ。」

椛さんの後を粛々と付いていくと森の中にぽつんと一軒やが見えてきた。へ～天狗の隠れやって感じ、渋くていいな～。あれ？でも文ちゃん天狗だからそのまんまなのか。

とんとんとん。

「文さん、お客さんを連れてきました。」

「はーい、あれその声椛？お客さんって？」

ガチャ。

「やっほー、遊びに来たよ～。」

ぱたん。

「え？何で閉めるの！？もしかして私嫌われてる！？」

「ちょちょっと待っててください！徹夜明けでまだ寝癖が…、あぁ嫌ってませんから心配しないで。」

「…では、私は仕事がありますからこれで。」

「あ！ちょっと待って。むぅ、本当はいて欲しいけど仕事なら仕方ないか…ハイ、これ私お手製のプリン。お世話になっちゃったから貰って。」

「いえ、ですが…。」

「いいのいいの、もともと少し多めに持ってきたから大丈夫だよ。」

「そうですか…ではいただきます。」

「うん！今度会ったとき感想きかせてね。」

ガチャ。

「お待たせしました。アヤメさんどうされたんです？いきなり…椛どこへ行こうとしてるんですか？早く入りなさい。」

「いや…私仕事…。」

「私から大天狗様に行っておきますから。」

そういいつつお供（？）の烏に手紙をくわえさせ飛ばす文ちゃん。

「文ちゃんそんな無理言っちゃ駄目だよ。椛さんにはお仕事があるんだから。」

「いえ、合法的に休めるならどんと来いです。」

「あれ？」

「それにもう送っちゃいましたから、椛がなんと言おうと無駄です。」

「あっるぇ～？」

「アヤメさん文様はこんな方ですから、もしお付き合いするなら慣れたほうがいいですよ。」

「む！なんです私を傍若無人みたいに！」

「あれ？違いますか？」

「まぁ違いませんが…。」

みっ、認めちゃうんだ。

「では、中へどうぞ。少々散らかってますが気にしないでください。」

「しっつれいしま〜す。」

文ちゃんの家の中は新聞記者だけあって、いろいろなメモや記事が散乱しておりまぁ…その…ちょっとだけ汚い…かな？

「まったく文様の家は相変わらず汚いですね。少しは掃除した方がいいんじゃないですか？」

「だっだめだよ。もっとオブラートに包まないと。」

「…オブラートに包むということは、アヤメさんもそう思っていたってことですか？」

あっ、文ちゃんの目が痛い…。

「あはははは〜、今日は先日のお詫びに来たんですよ。」

「先日のお詫び？何かありましたか？」

あれ？

「やだな〜、諏訪子様と神奈子様が…（ガタガタ）」

「なっなぜ震えているんですか？（ガタガタ）」

「そっそういう文ちゃんだって。」

「さっさあ？わからないんですが…心が拒否してるかのように思い出せません。」

「…じゃあ、思い出さないほうがいいんじゃない？」

「…そうですね。精神衛生上思い出すと悪い気がします。」

文ちゃん、恐怖で記憶を封印したんだ…。ちょっと羨ましい私も全部忘れたかった…（ガタガタ）。

「あっアヤメさん、文さんも落ち着いて。そういえばアヤメさんがお土産を持ってきてくれているそうですよ。」

「あれ、そうなんですか？期待しちゃいますよ～。」

「ふふん、期待しっちゃってください！ゆかりん印の新鮮卵をふんだんに使い、製法にまでこだわりにこだわった珠玉の一品！アヤメ特製プリンです！」

「「おお～。」」

「で！プリンとは何ですか？」

「え？そこから？じゃあ何で驚いたの？」

「「ノリで。」」

「ええ～、まぁ食べてみてよ。けっ、けして説明がめんどくさいとかじゃないんだからね！勘違いしないでよ！」

「む、ぷるぷるしてますね…。葛みたいな物でしょうか？」

「わふ～、いい匂いがします…。」

あれ？スルー？突っ込んでくれないの？…あっ！幻想郷にツンデレなんて浸透してるわけ無いじゃん！うぅ、はずかし～。

「アヤメさん、これ美味しいですよ！」

「この舌で蕩ける食感、程よい甘みそしてこの芳醇な香り…。うーまーぞー！」

「…えへへ～そうでしょ～。頑張ったんだから！」

「ええこれは良い物です！早速記事にしないと！」

「あぁっ、駄目駄目！そんなことしたらゆかりんに迷惑かかっちゃう。異変まで待ってて、って行ったでしょ。」

「む！そうでした…。残念ですがこのネタは暖めておきましょう。」

「うわ～おいし～。何個でも食べれちゃう…。」

「ほんと～ですね～。おいし～。」

うわ！椛ちゃん耳と尻尾パタパタさせてる…、文ちゃんもよっぽど幸せなのか羽をパタパタさせて…。抱きつきたい…、でも我慢我慢。今回はお詫びなんだから…。うぅ…。

「あっアヤメさん？なんだか目が怖いんですが…。」

「え？…なんでもないなんでもない。そうだ諏訪子様からもお酒預かってきてるんだよ～。お詫びだって。」

「おや諏訪子様までですか…。」

「このお酒おいし～んだよ～。外のお酒でそれなりに高価なものだから椛ちゃんと二人で飲んでね。」

「はい。…アヤメさんも飲んでいかないんですか？」

「私はもう帰るね、もう夕飯の準備しないと。…それにここにいると理性が（ぼそっ）」

「そうですか～残念です。…あれ椛なぜそんなビクッとしてるんです？」

「いっいえ、少し寒気が…。」

「お大事にね。それじゃまたくるね！」

「えぇまた。あ！今度来るときは椛に案内させますよ、天狗は縄張り意識が強いので余計な騒ぎを起こさないためにもお願いしますね。」

「送っていきますよ。」

「あっ、うんお願いしていい？」

「もちろん…文様お酒一人で飲まないでくださいね。」

「あははーいやだなーそんなことする分けないじゃない…。」

「棒読みで目をそらしながら言っても説得力ありませんよ。ではアヤメさん行きましょうか。」

飛び立った椛ちゃんのあとを飛び数分、守矢神社が見えるところまで来た。

「では私はここで、」

「うん、ありがと～。」

「あぁそうだ。この笛を渡しておきますよ、この笛は霊力をこめることにより特定の人物へ音を聞かせることが出来る物です。来れは私になってるので用事があるときは呼んでください。」

へ～、犬笛みたいなものかな？…椛ちゃんに言ったら怒られそうだけど。

「お土産期待してますよ。ではまた…。」

「ふふふっ、椛ちゃんは正直だね～。うん、期待していいよ！まったね～。」

今度はなにを作ってこっかな～。…クスクス、でもまずはあそこでプリン食べれなくて拗ねてる、諏訪子様と神奈子様をどうにかしないと…。
晩御飯はとっびきり腕によりを掛けて作らないとね。がんばるぞ～！

晴天、謝罪ところにより暴走（後書き）

おはこんにちばんは。
おだてられて木に登っているドライアイです。
今回は作者の頭が残念で暴走してしまいました。生暖かい目で見守ってやってください。

晴れ、弾幕練習のち気絶

「アヤメ今日は私と修行するぞ。」

え？…朝食が終わり神奈子様から発せられた一言は私を驚愕させるには十分だった……。

「神奈子様…？まさか…神奈子様神様をやめて巫女になるんですか！？」

「は？」

そして私の放った一言はみんなを驚愕させるには十分だった様だ。

「いやいやいや、アヤメ何を言っている！？」

「巫女服の神奈子さまかぁ、きっとお似合いなんだろうなぁ。」

「ええ、お似合いでしょうね。きっといらっしゃるだけで信仰してしまいます。」

「早苗まで！？」

「諏訪子様、良かったですね守矢神社は安泰ですよ！」

「そうだねぇ、諏訪大戦で敗れて以来神奈子と共に過ごしてきたが、まさか神奈子にそんな願望があるとは。」

ブチィ！

「〜〜〜キ・サ・マ・ラー！」

「きゃ〜〜神奈子が怒ったー逃げろー。」

「「あはははは」」

「ま〜て〜！」

今日も守矢神社はおおむね平和である。…あれ？神奈子様御柱なんて出してどうしたんです？無理！それはさすがに無理ですから、きゃ〜〜！

……たぶん。

「ごほん！…アヤメ今日は私と弾幕の修行だ。」

「あぁ弾幕のですか、修行って言うからてっきり巫女修行だと。」

「なぜそうなる！」

え〜でも私新米巫女だし…巫女修行の方が力入れてるし…仕方ないよね。

「アヤメ本気だったんだね、てっきりネタなのかと…。」

「アヤメさんはいつも本気ですよ、方向が間違ってるだけで。」

「むぅ侮れないなぁ…。あっそうだ早苗は私とだから。」

「はい、よろしくお願いします。」

「では修行を始める、庭に行こう。」

「え～、やっぱり巫女の修行しませんか？…私祝詞も噛まずに読めるようになったんですよ！」

「まあそれは良くやってると思うが…だが異変開始まであと一週間だぞ、異変解決来る博麗の巫女通称鬼巫女。邪魔する物すべてを蹴散らし、ひどい時には獲物を探し関係の無い者たちまで問答無用で殺られるらしい…。」

「……え？なにそれ…怖い。」

「少しでも身を守れるように修行するのだ！」

「はい！…私まだ死にたくありません！お願いします神奈子様、私を強くしてください！」

「あぁ！…私の修行はスパルタだぞ！ちゃんと付いて来い！」

「はい！どこまでも付いていきます神奈子様！」

「師匠と呼べ！」

「はい、師匠！」

「では行くぞ！」

「……うわーなにあのテンション。相変わらず体育会系だね～。アヤメ、ちゃんと付いていけるかな？」

「諏訪子様…神奈子様の仰られた巫女の話は本当でしょうか…？」

「さ～？でも流石に殺されないでしょ…。」

「そっそうですよね…。」

「…。」

「…。」

「……修行しよっか。」

「…はい、少しでも抗えるようにしましょう。」

「…うん、そだね。」

「…。」

「…。」

「よし！ではまずお前の霊弾を見せてみろ！」

「はい、師匠！」

神奈子様の言葉を合図に霊力を滾らせる。イメージはマシンガン、威力は弱くてもいい。質より量、圧縮した空気を霊力でコーティングしただけのはりぼて。しかしそれは相手を怯ませるほどの壁となる！

「いきます！」

「よし、来い！」

両手、頭を起点にし霊弾を打ち出す！

「……へりゃー！」

…なぜか神奈子様が空中でこけた気がしたが気にしない。打ち出された霊弾は真っ直ぐ神奈子様へ…？

「神奈子様！？避けなきゃ危ないですよ！」

「…？何を言っている、変な掛け声だけで何も”げふっ、がはぁ！何！？ぐはっ！」

ガガガガガガガッ！…ぜっ全弾当たっちゃった。

「だっ大丈夫ですか！？…しっ師匠死んじゃやだ！」

「…勝手に殺すな！」

痛っ！…うぅ、何も叩かなくても……。

「しかし一体なんだったんだ？いきなり衝撃が…。」

「あっそれ私の霊弾です。神奈子様まったく微動だにしないから驚いちゃったんですよ！」

「なに？……霊弾を出してみろ。」

「？、はい。」

「ほぉ…見えずらい霊力か、珍しいな。」

「あっ、やっぱり珍しいんですね。私は早苗ちゃんみたいな綺麗な色が良かったんですけど…。」

「…能力に影響されているのか？…だがこれは弾幕ごっこでは大きなアドバンテージだ。よし霊力量は大丈夫そうだな。次はコントロールだ好きなように形を作って見せてくれ。」

…むぅ、好きにって言われてもなぁ。そもそも私の霊力見えにくし…あっ、そうだ。

「神奈子様こっち来てください。」

「あっ、おっおい。手を引っ張るな自分で歩ける！」

さてやってきました裏手の湖！

「ではいきますよ～。」

霊力を発生させつつ、水と一緒になれ～なれ～と念じながら形作っていく。

「ほぉ…。」

「名付けて！水上動物園！」

「…そのまんまだな。」

「…言わないでさい。…こほん、どうです！綺麗でしょ～。神奈子様に能力で何が出来るか覚えていけって言われてから頑張ってるんですよ。」

水上に出来たキラキラ光る動物達。うん！大満足。

「…なぜみんなデフォルメされてるんだ？」

「そっちの方が可愛いじゃないですか。リアルな方が好きならそうしますが。」

「いや、まあいい。コントロールも合格だ！」

「やった。」

「では！……弾幕ごっこの華スペルカードだ！」

「はい師匠！スペルカードですね。」

「ああ！スペルカードはその者の心が表れるという。お前だけのスペルカードでお前の心を見せてみろ！」

「はい師匠！……で？」

「で？」

「スペルカードとは何ですか？」

ゴガン！

うわー。痛ったそう～、神奈子様がいきなり地面にめり込むほどの勢いでこけっちゃった。いやどちらかというと頭突き？

「だ、大丈夫ですか？」

「ア・ヤ・メ～！私のことを馬鹿にしているのか！？」

「はい？いえいえ滅相も無い、キチンと敬ってますよ～。」

「そうか、そうだな。ちゃんと敬ってるよなただ！」

「あれ？神奈子様！？どうしてわたしの頭を掴んでるんです？」

「お・前・の・態・度・が・気・に・入・ら・な・い！」

ギリギリギリギリ！

「あたたたたたた！」

「……あべしとでも言えばいいのか？」

「痛いですよ～。どうしてですか～！？」

「いやすまん、カッとしてやった。今は反省している。」

「む～、…反省してくれているならいいです。」

「いいのか！？…まあアヤメがいいならいいが……幻想郷ではないだろうが騙されない様に注意しろよ。」

「？…はい、注意します。」

「良い娘ではあるんだが。…疑問に思ったことはすぐ聞くように！」

「はい！…スペルカードとは何ですか？」

「うむ、これだ。このカードのような物に、事前に霊力をこめておき宣言と共に発動させる。…言っただけではわかりにくいだろうから実際に避けてみろ。」

「えっと、わかったので遠慮したいな～とか。」

「遠慮なんてしなくていい。さあ行くぞ。」

「わ～！襟持たないでください！自分で飛びますから！…あっ、さっき引っ張って来たこと怒ってますね！」

「わはははは、何の話かわからんな！」

うぅ～絶対恨んでる～。

～神奈子～

「よし！では行くぞ！」

「うぅ、来なくていいです～。」

「そんなつれないことを言うな。神祭「エクスパンデッド・オンバシラー」…これくらいは軽く避けてみろ！」

「うう～神奈子様の鬼～！」

……まだブツブツ文句をいっているアヤメに無数のお札と共に御柱を模ったレーザーが襲い掛かる！それに対しアヤメは…

「何！？」

紙一重でスルスルと流れるように避けていく！

……発動時間が終わりスペルブレイクする。

「へへ～。どうですかー昔から目だけはいいんですよ～。貴方の弾幕なんて止まって見える！」

「……ほぉ～。」

「あれ？神奈子様？どうしてそんなに怒ってるんです？…もちろん冗談ですよ？一度言ってみたかっただけですよ？」

「あぁわかってる、冗談なのくらいわかってるし怒ってなどいない！さあ次だ避けて見せろ！これが私のラストスペルだ！」

「風神様の神徳」

様々な色の御札が次々と花を模りほどけていく、

「怒ってます、怒ってますよね！？これは無理、無理無理無理！きゃ～～～。」

ピチューン

ふふん、始めは何とか避けていたようだが流石に避け切れなかったか。当たったアヤメが落ちて……って、

「しまった！？大丈夫かアヤメ！」

……すべての神力を推進力にまわし何とか地面に落ちる前に受け止めることが出来た。…むぅ少しやりすぎたな…早苗怒るんだろうな…

……くっ、こんなに神社に戻りたくないと思ったのは初めてだ。…はぁ

～アヤメ～

「…ん？あれ？」

ここは…私の部屋？いつ戻ってきたんだっけ？えっと…確か異変で鬼巫女が世紀末になって、てれってーされない様に神奈子様と修行を…？

……何か間違えてるような…あってる様な？まぁ気にしないでおこう。

あぁ、あのまま気絶しちゃったんだ…神奈子様が運んでくださったのかな？あとでお礼言わないと。

「…こ！修行…加減…！」

諏訪子様の声？なんだか怒ってるみたい…

居間の方かな…少し様子を見てこよ。

スッ、

少し障子を開け中の様子をのぞいてみると、諏訪子様と早苗ちゃんが神奈子様を正座させて怒ってる…？なにがあったのかな？

…早苗ちゃんなんで笑顔なんだろう…張り付いたような…見てるだけで威圧されちゃう。ガタガタ

あっ諏訪子様と目が合っちゃった…入りたくないな…でもしかたないよね…。

スッ、

「諏訪子様、早苗ちゃ「「アヤメさん！／アヤメ～。」」はっはい！」

「もう起きて大丈夫なんですか？」

「もう起きて大丈夫なの？」

「ええ特に違和感もありませんし大丈夫ですよ。」

「一時間も目を覚まさないから心配したんだよー。」

「そんなに！？…心配してくださってありがとうございます。」

「うんうん、大丈夫そうで安心したよ～。まったくこの馬神奈子は。」

「うぐっ…。」

「諏訪子様、そんなと事言わないでください。神奈子様は私の為を思ってやってくれてるんですから、今回のことも実際の弾幕ごっこでありうる事を教えてくれるためにやってくれたことなんだと思います。なんてったって神奈子様なんですから！」

「うぅ…。」

あれ？神奈子様が唸ってうずくまっちゃった。

「神奈子様大丈夫ですか？おなかが痛いんですか？」

「くっ、良心が……。」

「本当に大丈夫ですか！？すこし横になりますか！？」

「いや大丈夫だ、大丈夫だから…一人にさせてくれ……。」

「そう…ですか…。何かできることがあったら何でも言ってくださいね。」

「あぁ…。」

「うわ～、あれ素だよね。神奈子がどんどんへこんでく…。」

「えぇ完全に良かれと思ってやってますね……完全に逆効果ですけど。」

「いい娘だねぇ…逆効果だけど。」

「あれ？諏訪子様、早苗ちゃん何か言った？」

「「いえいえ何も／なんでもないよ～。」」

「？そうですか？早苗ちゃん今日の晩御飯は全部私に料理させてっ。

」

「え？どうかなさいました？」

「なんだか神奈子様調子悪そうだし、今日特訓でお世話になったからね！神奈子様の好物を腕によりを掛けて作ろうかと思って。」

「へ～、そういうことならぜひ」

「え～神奈子ばっかりズルイー。」

「クスクス、なら明日は諏訪子様が特訓して下さいますか？明日は諏訪子様の好きな物い～ぱい作って差し上げますよ。」

「わーい、そういうことだから早苗、神奈子明日は交代だよ！」

「はい、わかりました。」

「あぁ…わかった…。」

「では作ってきますね！神奈子様楽しみに待っててください♪」

「神奈子も大変だね……罰だと思ってあきらめな。」

「……わかってる。」

晩御飯はとっても美味しく出来たけど神奈子様は気分が優れないよ

うだった…もっと頑張って落ち込んでても笑顔に出来るように頑張らないと！

晴れ、弾幕練習のち気絶（後書き）

弾幕の表現が出来ない…どうすれば…
感想ありがとうございます！
感想・アドバイス・誤字報告どうかお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1881y/

東方新米巫女奮闘記？

2011年11月17日19時42分発行